ロマン主義作家としてのチャールズ・ラム *

吉　田　泰　彦

はじめに

ラムの今日的な位置付けについて簡単にみてみたいと思います．私が大学生の頃の 1970 年代にはラムの文学的成果のうちで最も著名な『エリア随筆』は本邦の大学ではあまり読まれなくなっていたというような印象があります．これより一世代前くらいが，おそらく最後の時代だったのではないでしょうか．日本の一般読者に入手可能な翻訳本はごく僅かであり，その中で恐らく第一番目にくるのは戸川秋骨訳『エリア随筆』と思われますが，岩波文庫 1940 年初版です．英米での状況はもう少しはましにみえますが，それほどかんばしくはなさそうで，1983 年に公刊された Winifred F. Courtney の *Young Charles Lamb* の “Introduction” においては，悲観的な断定を避けるために微妙な調子を取っている感があります．なお，引用文中に「繁盛しているラム協会」とありますが，仄聞するところによれば，現在は「繁盛している」ともいえない状況とのことです．

> Lamb is a little out of fashion today, though the informal essay is returning – with E. B. White’s recent collection, the Op-Ed page of the *New York Times,* and other manifestations. But he continues to attract enthusiasts; he stands up as a writer still. There is a flourishing Charles Lamb Society in London with an international membership…. (xvi)

日本においてラムについておそらく最大の著作をものしたと評して過言ではないと思われる，福原麟太郎は『チャールズ・ラム傳』において，ラムの文学的絶頂期を『ロンドン雑誌』にエッセイを寄稿し始めた 1820 年から，これを集めて一本とした『エリア随筆集』が出版された 1823 年頃とし，この著書の

中にラムの最良の部分が収まっていると言います．また，たいていの研究者・批評家と同様，ラムの特徴を記すのに，福原は同時代のロマン主義詩人たち，文学者仲間をはじめとする人々との親密な交友について触れています．

そのころ，彼のまはりを，親友のマニングだの，文壇日記家のロビンソンだの，ラムの傳記を書くタルフォードだのが取りまいてゐる．そして二巻の著作集が出る．シェリーやキーツとも知りあひ，一八二〇年から『ロンドン雑誌』にエリア随筆を書きはじめる．二一年，二二年といふころ彼はその文筆生活の極點に達したと言つてよい．そこまでおよそ十年ほどが彼の人生の盛りであつたのではあるまいか．その總集が二三年『エリア随筆集』である．

その随筆集の中にラムの大切なものはみな入つてゐるやうだ.... (iv)

そして，そのタイトルに違わず主として伝記的な手法を用い，時に鑑賞を織り交ぜる福原の『ラム傳』は，いうまでもなく，ラムの私人としてそして作家として親しい友人であり，ロマン主義最大の詩人であるコールリッジ，ワーズワスとの交流に関しては細大漏らさず記載しています．とはいえ，ラムの作風について，エリア「デビュー」する遥か以前，姉メアリーの事件をきっかけとして断筆宣言する以前の 1790 年代中頃に書かれた恋愛ソネット関しては別とすれば，ロマン主義といった形容句を用いることは絶えてありません．そして，この事情はまた英米の研究者の間において共通してみられるおおよその傾向といっていいと思われます．ここで，たとえば，ワーズワス，コールリッジと比較してラムが一般的にはどのように評価されているかを『ブリタニカ国際大百科事典』にてざっと確認してみたいと思います．

ワーズワス

Wordsworth, William

[生] 1770.4.7. カンバーランド , コカマス

[没] 1850.4.23. ウェストモーランド , グラスミア

イギリスの詩人。革命さなかのフランスを訪れて強い影響を受け , さらにフランス女性との間に 1 女をもうけたが , イギリスの対仏宣戦布告によって恋愛は挫折し , フランスに恐怖政治が行われるに及んで , 革命への疑惑と不信をいだくにいたった。この頃 , 詩人 S.T. ⇨コールリッジと知合い , イギリスにおけるロマン主義の開幕を告げる詩集『⇨抒情歌謡集』Lyrical Ballads(1798) を共同で発表。 1801 年の第 2 版にはロマン派の宣言ともいうべき序文を加えた。大作『⇨序曲』Prelude は 05 年に一応の完成をみたが , 推敲を加えて死後の 50 年に刊行された。 07 年刊の『詩集』Poems in Two Volumes も多くの傑作を含んでいる。『逍遙遊』The Excursion(1814) 以後 , 創作力の涸渇を指摘されたが , イギリス文学史を飾る第一級の詩人であることに変りはない。 43 年桂冠詩人となった。(下線は筆者による．)

そして，コールリッジは

コールリッジ
Coleridge, Samuel Taylor
[生] 1772.10.21. デボンシャー , オッタリーセントメアリー
[没] 1834.7.25. ハイゲート
イギリスの詩人 , 批評家。牧師の家に生れ , 一種の神童として少年時代から文学書や哲学書を耽読。クライスツ・ホスピタル校で C. ラムと交遊 , ケンブリッジ大学中退後 R. サウジーと知合い , パンティソクラシー Pantisocracy と呼ぶ平等社会をアメリカに建設する計画を立てたこともあったが , 詩人としての開眼は 1795 年の W. ワーズワスとの出会いに始り ,2 人でロマン主義の金字塔ともいうべき詩集『⇨抒情歌謡集』Lyrical Ballads(1798) を生み出した。彼の有名な『⇨老水夫の歌』The Rime of the Ancient Mariner はこの詩集の巻頭を飾る。そのほか , 代表作『クリスタベル』Christabel, 夢のなかで詩想を得たといわれる名作『クーブラ汗』Kubla Khan もこの頃の作である。やがて健康を害してアヘン常用者となったが , 文学活動は盛んで ,1810 年頃から文芸講演を行なったが , なかでもシェークスピアに関するものは有

名である。さらに『⇨文学的自伝』Biographia Literaria(1817) において , ドイツ哲学論 , イマジネーション論などを展開して高い評価を得た。思想家としてはドイツ観念論のよき理解者であり , 詩人としては幻想に満ちたロマン派の巨頭であった。(下線は筆者による．)

これに対して，ラムに関する記載は，次のようです．

ラム
Lamb, Charles
[生] 1775. 2. 10. ロンドン
[没] 1834. 12. 27. ミドルセックス，エドモントン
イギリスの随筆家。東インド会社に勤務 (1792 ～ 1825) するかたわら，文筆活動に従事．『シェークスピア物語』Tales from Shakespeare(1807)，『ユリシーズの冒険』The Adventures of Ulysses(08) は古典を年少の読者の身近な読み物としたもので，前者は姉メアリーとの共著．名作『エリア随筆』Essays of Elia(23) は，1820 ～ 23 年に，『ロンドン・マガジン』に寄稿したエッセーを集めたもので，33 年に『後集』Last Essays が出た．自伝的なものをはじめ身辺のくさぐさの事柄を取上げ，しみじみとしたユーモアと情趣をたたえるそれらの作品は，イギリス伝統の随筆文学の頂点に立つもの．また，エリザベス朝演劇の批評家としてもすぐれた業績を残している．(下線は筆者による．)

３つの記事それぞれのアンダーラインをかけた部分を比較してみれば，ラムの位置付けが，ワーズワス，コールリッジのそれとは相当に異なることが明らかです．一見したところ，ロマン主義的な特質は指摘されていないようにみえます．ここで言われている「自伝的なもの，身辺のくさぐさの事柄」は，ラムの場合，必ずしも直接的にロマン主義に結びつくものというより，どちらかというと，卑俗さ，ないしは庶民的感覚といったものに接近しているように感じられます．例えば，福原は次のように言います．

しかし、「私はバカが好きなのです」といふ。それは「萬愚節」といふ随筆だ。人間はおろかなること人間らしけれ、といふ。恐らくラムの思想はここに極まつてゐるであらう。さういふ愚の哲学がラムのエピキュリアニズムとストイシズムとを包んでゐる。(同書 , v)

あるいはまた，西脇順三郎の言葉を引用して，「ラムの町人哲学」(同所) という評言をラム文学の特質として挙げていることからすると，庶民的人生観ともいうべきものに着目していることが読み取れます．つまるところ，「愚の哲学」といい，「町人哲学」といい，要するに，福原流の別の言い方を借りるならば，「小市民の生活の哀感」といったものと通底していることが理解できます．そして，こうした概念に，独居，幻想・幻視，超絶性，孤高あるいは啓示，さらには，環境との想像的一体感，など通例ロマン主義的特徴とされるものとの共通性を見出すことはおよそ困難と思われます．しかしながら，ラムのエッセイをつぶさに読めばそうではありません．本発表では数編のエッセイを用いて，そのロマン主義的特質を，さらに，具体的にコールリッジ，ワーズワスの詩作品との共通点と差異を探る予定です．

1. 出発地点—「酔っぱらいの告白」(1813)

さて，次に比較的早い時期に書かれたエッセイ「酔っぱらいの告白」を取り上げて，そのスタイルを 10 年後の『エリア』(1823 年) あるいはさらに 10 年後の『後集』(1833 年) のそれと対比することによって，スタイルの変化，ラムの想像力の特質についてざっと検討してみたいと思います．

この一編を予備知識なしに読むと，私の場合がそうでしたが，十中八九完全な実話ととって非常な恐怖感にとらわれるのではないでしょうか．後々の作品にみられるような弛みや一見したところの脱線などは，終始顔を出しません．ラムの文章は古雅なそして詩的な風味を帯びて高度に知的な文体で貫かれていて，英国伝統のドライ・ヒューモアの部類に属するといえます．そして，ラムの，読者の想像力を高度に刺激する力量 (tour de force) は注目に値します．特

にイタリック化した一節の，金言的な表現の詩的美しさは注目に値すると思われます．

> To be an object of compassion to friends, of derision to foes; to be suspected by strangers, stared at by fools; to be esteemed dull when you cannot be witty, to be applauded for witty when you know that you have been dull; to be called upon for the extemporaneous exercise of that faculty which no premeditation can give; to be spurred on to efforts which end in contempt; to be set on to provoke mirth which procures the procurer hatred; to give pleasure and be paid with squinting malice; *to swallow draughts of life-destroying wine which are to be distilled into airy breath to tickle vain auditors; to mortgage miserable morrows for nights of madness; to waste whole seas of time upon those who pay it back in little inconsiderable drops of grudging applause,—are the wages of buffoonery and death.* (I 135; イタリックは筆者)

ただ，この作品は一貫性，すなわち，読者の関心をそらさないという点からは申し分ありませんが，著者によるコントロールが強力すぎて，読者がみずから進んで想像力を行使してその世界に参入する機会を奪う傾向にあることは否めません．皮肉なことには，読者が我に帰って，この均整がとれて極度に彫琢された静謐な文体と，主人公である滅亡の淵にいるアル中患者との激烈な落差に疑問を抱く時，ラムの魔法は解けてしまうのです．このように，ラムの多くの作品に共通する真偽のないまぜ，虚実の狭間の問題がここでも存在するわけですが，ある意味で腕自慢ともいうべき，このように極端に実験的な手法はこの先用いられなくなります．したがって，これはやはり習作期の作品とみるべきだと思われます．

2. リアリティと想像力—「ジャクソン大尉」(1824)

先にみた真偽ないまぜの問題がラムにとっていかに枢要なものであるかを，『後集』に収められた「ジャクソン大尉」を通して確認したいと思います．『ラ

ム全集』の編者 R. V. Lucas は，主役ジャクソン大尉のモデルは明らかでなく，「圧倒的なリアリティ」にもかかわらず，「おそらくラムが時折繰り出してきた架空の人物のひとり」(II 423) であると指摘します．「酔っぱらいの告白」と較べて，このエッセイにおいてエリアは主役のごく控えめな相方，かつて自身の交際した非常に特殊な人物の人となりを紹介する語り手に徹しているようにみえます．前者と同じく誇張の手法は採用されていますが，こちらでは，読者にそれとなく誇張に気づかせつつ，それでもなおルーカスのいう「圧倒的なリアリティ」を保ち続けるという離れ業をやってのけます．しかもラムの見事な手腕は，実体験の語り手の役柄を降りることなく，人物批評，さらには，想像力批評を成し遂げていることです．確定的な証拠がないことはもちろんですが，このジャクソン大尉という強烈に想像力を駆使する造型は私には，コールリッジを思い起こさせます—『エリア随筆』に収録された「人間の二種族」というエッセイはコールリッジを主人公としています．そして，次にみるように，その特異な性格を解剖せんばかりに分析，批評するエリアの態度からは，年来の友人でありロマン主義詩の導き手であるコールリッジの想像力論に対する批評がこめられているらしい印象を受けます．

> *He was a juggler,* who threw mists before your eyes—you had no time to detect his fallacies. He would say “hand me the silver sugar tongs;” and, before you could discover it was a single spoon, and that plated, he would disturb and captivate your imagination by a misnomer of “the urn” for a tea kettle; or by calling a homely bench a sofa…With nothing to live on, he seemed to live on everything. *He had a stock of wealth in his mind; not that which is properly termed Content, for in truth he was not to be contained at all, but overflowed all bounds by the force of a magnificent self-delusion.* (II 191-2; イタリックは筆者)

一つの段落の中で，大尉を「手品使い」と一刀両断に切って捨てる一方で，「彼は心の中に宝を蓄えていた」といって対極的な見方を示します．「それは正

確には中身というようなものではない，なぜなら彼は自分の中に収まっているような人ではなく，周りに溢れ出ていたからだ」という叙述からは，想像力が生身の人間の中で働いている様子をとらえていることが理解できます．そしてまた，–以下のエピソードが事実に基づいているのではないとすれば–このように詩的に圧縮された抽象言語に血肉を与えて，具現化することをラムは怠りません —

> Her daughters were rational and discreet young women; in the main, perhaps, not insensible to their true circumstances…His riotous imagination conjured up handsome settlements before their eyes, which kept them up in the eye of the world too, and seem at last to have realised themselves; for they both have married since, I am told, more than respectably. (II 192)

このようにしてラムの映し出す想像力からは，抽象的・観念的なものと同時に，それがある特定の性格，個性を持つ人物がその人生において想像力を行使した時どのような行動となって，また，周囲の人々にどのような影響を及ぼすか，という様子が立ち現れてきます．すなわち，具象と抽象，散文と詩，俗と聖という二種類の境界が一つのエクリチュールの中で衝突することなく同居すること，これこそがラム文学の真骨頂といっていいと思われます．そして，人，場所，時の厳密な指定に始まり，最終的にこれらの次元の超克を企図するのは，ロマン主義詩，とりわけ，『リリカル・バラッズ』に代表されるワーズワス，コールリッジの詩の特徴ではないかと思われます．

ラムの初期詩作品のいくつかは 1796 年 4 月に『種々の主題についての詩集—S. T. コールリッジ作』に収められましたが，周知のように，9 月に起きたメアリーによる母親刺殺事件を機に文筆家・詩人としての将来をあきらめました．後に決心を翻したものの，ふたりの友人たちのような本格的な詩人としての活動に入ることはなく，20 年余りを，振り返ってみれば余技ともいうべき作品の制作に費やした末に，エリア・エッセイにたどり着いているわけです．ラムはこの間，公私にわたる交際の中で，友人たちが新しい詩の地平を切

り開いていく様をつぶさに眺め，その新しい潮流の意味を真髄まで理解し，評価していました．そして，このことは彼らに宛てた数多くの書簡から明瞭に見て取れます．端的にいえば，エリア・エッセイはラムの遅れてやってきた『リリカル・バラッズ』という側面があるのではないか，とわたしは考えています．

3. 過去へのまなざし—「南海会社」(1820)

『エリア随筆』の冒頭を飾るこのエッセイは，そのうちで『ロンドン雑誌』に最初に発表された作品ですが，完成度という点からして決して他の作品と比べて劣るということはありません．あえて欠点らしきものを探すとすれば，話の枠組み，すなわち，会社の衰亡と，名物社員の紹介の部分のバランスが後者に傾きすぎているように感じられる点にあります．この点に関する深入りは避けて，「南海会社」のテーマが「過去」についてであることを，まず確認したいと思います．

18 世紀初頭に設立されたこの会社は，1720 年の南海泡沫事件の株大暴落によって英国民の間に大量の破産者を出したあげく，政府の救済策によって，最終的には 19 世紀半ばまで細々と生き延びることとなりましたが，南海地方との貿易は 1750 年に終わりました．したがって，ラムが在籍した 1791-2 年当時はエッセイの記述にあるように，会社の繁栄はすでに遠い過去のものとなっていました．現在の沈滞した静穏に加えて，かつての繁栄が二重写しになって描出されます．

> This was once a house of trade,—a centre of busy interests. The throng of merchants was here—the quick pulse of gain—and here some forms of business are still kept up, though the soul be long since fled. (II 1)

対極的な二つの状況はひとつの組織体の中で分ちがたく生きていることが，ラムの想像力によってしっかりと捉えられ，簡潔で雄勁な文章は見事にこれを体現しています—内容と文体の見事な一致はラム文学の真骨頂であって，かつ

て本格的な詩人を目指したことの貴重な名残といえるのではないでしょうか．エッセイの終わり近く，「南海会社」のエッセンスは会社の存亡ではなく，人間，しかも過去に生きていた人間が，今に生きる人々に対して持ち続ける意義にあることが明かされます．

> Much remains to sing. Many fantastic shapes rise up, but they must be mine in private:—already I have fooled the reader to the top of his bent…*Their importance is from the past.* (II 7; イタリックは筆者)

過去へのこだわりがより具象的に読み取れる箇所を拾ってみましょう．そして，おそらくこの記述からは，ワーズワス詩学にある回想の原理に似たものを認めることも困難ではないと思われます．

> …*to the idle and merely contemplative,*—to such as me, old house! there is a charm in thy quiet:—a cessation—a coolness from business—an indolence almost cloistral—which is delightful!...*They spoke of the past:—the shade of some dead accountant, with visionary pen in ear, would flit by me, stiff as in life.* (II 2; イタリックは筆者)

過去と現在が地続きであることを頑固に主張する「私たちは七人」(1800)，想像力による幼時の幻視的な時の再現を願う「カッコウに寄せる」(1807)，あるいは，つぐみの鳴き声を聞いて突如として故郷の景色を眼前に浮かべる出稼ぎ少女を描写する「哀れなスーザンの夢」(1797) 等々，人と過去との強固な結びつきを歌うワーズワスの作品は枚挙に暇がありません．

4. 消滅と想像力—「H—シャーのブレークスムア」(1824)

後でみる「マカリー・エンド」と対をなす作品である『後集』所収の「ブレークスムア」は，故郷再訪という共通するテーマをもちつつも，スタイルとムードの点でも相当の開きが認められます．前者と異なる点は，後者においてはゆかりの屋敷が完全に取り壊されて，よすがとなる建物の切れ端さえ残存し

ていない，ということです．すなわち，手掛かりはエリアの心の中に残る記憶という切羽詰まった状況であって，このことと緊縮した厳しいスタイルおよびムードは，内容と外観 (文体) の一致を旨とするラム・エッセイの意図して得られた結果にちがいありません．これがタイトルの表記法にまで及んでいるとみるのはうがち過ぎでしょうか．いずれにしても，この作品における高揚した調子がしばしば詩的な響きを帯びることは自然な成り行きとみていいと思われます—大理石の胸像をめぐるラムの想像力はキーツの「ギリシャの甕のオード」を思い起こさせます—

> Mine too, BLAKESMOOR, was thy noble Marble Hall, with its mosaic pavements, and its Twelve Cæsars—stately busts in marble—ranged round: of whose countenances, young reader of faces as I was, the frowning beauty of Nero, I remember, had most of my wonder; but the mild Galba had my love. *There they stood in the coldness of death, yet freshness of immortality.* (II 157; イタリックは筆者)

主人公が子供時代に貴族の残した，古くて由緒のある屋敷で過ごした日々がどのようなものであったかが，詳細かつ鮮明に語られます．彼は，住む人のほとんどいなくなった大きな家を独り占めするようにして，かつての栄華の面影の色濃く残る部屋部屋を探索したり，オヴィディウスの物語からの場面を描くタペストリーで飾られた寝室で生きた人々に囲まれているかのように感じたり，また屋敷を取り囲む敷地内の庭，林，花園をひとりで心ゆくまで堪能します．少年にとっては長い歴史を秘めたこの広大な屋敷こそが空想と想像をかき立てる絶好のロケーションであり，建物の消滅とともにその豊かな過去もまた失われたことが，淡々として平静な調子で語られます．

> Then, that haunted room—in which old Mrs. Battle died—whereinto I have crept, but always in the day-time, with a passion of fear; and a sneaking curiosity, terror-tainted, to *hold communication with the past.—How shall*

they build it up again?

It was an old deserted place, yet not so long deserted but that traces of the splendour of past inmates were everywhere apparent. Its furniture was still standing—even to the tarnished gilt leather battledores, and crumbling feathers of shuttlecocks in the nursery, which told that children had once played there. *But I was a lonely child, and had the range at will of every apartment, knew every nook and corner, wondered and worshipped everywhere.* (II 155; イタリックは筆者)

少年が後年—おそらくは大人になってから—発見したという，邸宅からほど遠くないところにある小川についての記述には注目すべき点があります．

there lay—I shame to say how few roods distant from the mansion—*half hid by trees,* what I judged some *romantic lake,* such was the spell which bound me to the house, and such my carefulness not to pass its strict and proper precincts, that *the idle waters lay unexplored for me;* and not till late in life, curiosity prevailing over elder devotion, I found, to my astonishment, a pretty brawling brook had been *the Lacus Incognitus of my infancy.* Variegated views, extensive prospects—and those at no great distance from the house—I was told of such—what were they to me, being *out of the boundaries of my Eden?*—So far from a wish to roam, I would have drawn, methought, still closer the fences of *my chosen prison;* and have been *hemmed in by a yet securer cincture of those excluding garden walls.* (II 155; イタリックは筆者)

ここには韻文で表されるような濃い内容が，明示的あるいは示唆的なアルージョンに支えられて展開されています．この一節の基調となっているのは，ミルトンの『パラダイス・ロスト』に描かれた原初の人間アダムとイブが神の言いつけを守ってエデンの園で幸福に暮らしているさまです．と同時に，存在を教えられながらも，あえて自らに課した境界線を侵さず，そして，侵さなかっ

たことによって，少年の心に「未知の湖」として保たれていたがゆえにロマン主義的な秘密の感覚が生まれたことが記されています．さらにこの一節に関して注目すべき特質は，事実と空想，時期を違えた二つの経験が解きがたく絡まり合っているさまであり，相異なる平面が融合しているような錯覚を与える空間の創造といっていいのではないでしょうか．ついでながら，“my chosen prison”「わたしの選び取った牢獄」という一句には，遡ること 27 年前の 1797 年にコールリッジがラムに贈った著名な詩「この菩提樹の木陰わが牢獄」(This Lime-Tree Bower My Prison) のモチーフが，逆説的な「喪失による発見」というコールリッジ的なコンセプトと併せて，エコーしているように感じられます．

また，壁に囲まれた不可侵の土地，神聖な流れ，巨大で意義深い建物，という設定に加えて，今は亡き壮大な遺跡を想像力によって再現するというテーマもまたコールリッジの「クーブラ・カーン」(1798 年制作，1816 年発表) にみられるものです．

In Xanadu did Kubla Khan
A stately pleasure-dome decree:
Where Alph, the sacred river, ran
Through caverns measureless to man
Down to a sunless sea. 5
So twice five miles of fertile ground
With walls and towers were girdled round:
……..
Could I revive within me
Her symphony and song,
To such a deep delight ’twould win me,
That with music loud and long, 45
I would build that dome in air,

That sunny dome! those caves of ice!
And all who heard should see them there,
And all should cry, Beware! Beware!
His flashing eyes, his floating hair! 50
Weave a circle round him thrice,
And close your eyes with holy dread,
For he on honey-dew hath fed,
And drunk the milk of Paradise.

(“Kubla Khan,” 1-54; イタリックと下線は筆者)

コールリッジの詩においては魔法を使う者の相貌として，ラムのエッセイにおいては想像力によって現出した女性の特徴して，「目」と「髪」が強調されています.

That Beauty with the cool blue pastoral drapery, and a lamb—that hung next the great bay window—with the bright yellow H——shire hair, and eye of watchet hue—so like my Alice!—I am persuaded she was a true Elia—Mildred Elia, I take it. (II 157; 下線は筆者)

また，ラムが「クーブラ・カーン」に並々ならぬ理解と共感を示したことは，出版間際の時期 (April 26, 1816) にラムがワーズワスに宛てた手紙から容易に見て取れます.

Coleridge is printing Xtabel…with what he calls a vision, *Kubla Khan—which said vision he repeats so enchantingly that it irradiates and brings heaven and Elysian bowers into my parlour while he sings or says it….* (*Letters,* III 215; イタリックは筆者)

5. 回想と想像力—「ハーフォードシャーのマカリー・エンド」(1821)

内容の面からみると，「マカリー・エンド」の筋立てと趣きに関しては，

ワーズワスの「ティンタン僧院」と幾分とも共通するところがあるように思われます．ただ，一見するとこのような見方は奇異に感じられるかもしれません．前者は田舎とはいえ，訪ねていった先は村中の人家であり，後者の舞台は人里離れたワイ川のほとりで，わずかに残る人の住む気配さえも，詩人はあえて消し去ろうとしているようにみえるからです．

The day is come when I again repose
Here, under this dark sycamore, and view 10
These plots of cottage-ground, these orchard-tufts,
Which, at this season, with their unripe fruits,
Among the woods and copses lose themselves,
Nor, with their green and simple hue, disturb
The wild green landscape. Once again I see
These hedge-rows, hardly hedge-rows, little lines 10
Of sportive wood run wild; these pastoral farms
Green to the very door; and wreathes of smoke
Sent up, in silence, from among the trees,
With some uncertain notice, as might seem,
Of vagrant dwellers in the houseless woods, 20
Or of some hermit's cave, where by his fire
The hermit sits alone.

("Tintern Abbey," 9-22)

とはいえ，舞台設定の差異はふたりの作家の基本モードの違いに基づくものと理解しなければなりません．ラムは普段からワーズワスに対して最大限の敬意を払っている一方で，次のワーズワスに宛てた手紙 (1801 年 1 月 30 日) からは，己の立場を鮮明にしようとするきっぱりとした態度が見て取れます．

I don't much care if I never see a mountain in my life. I have passed all my days

in London, until I have formed as many and intense local attachments, as any of you mountaineers can have done with *dead nature*. The Lighted shops of the Strand and Fleet Street, the innumerable trades, tradesmen and customers, coaches, waggons, playhouses, all the bustle and wickedness round about Covent Garden, the very women of the Town, the Watchmen, drunken scenes, rattles…all these things work themselves into my mind and feed me, without a power of satiating me. The wonder of these sights impells me into night-walks about her crowded streets, and I often shed tears in the motley Strand from fulness of joy at *so much Life*. (I 267)

ごく荒っぽくまとめますと，ワーズワスにとっての自然はラムにとっては生きて活動する人間ということになります．

このエッセイをワーズワスと結びつけるもうひとつの絆は，エッセイ中に引用されているワーズワスの詩「ヤロー訪問」(1814) の一節にあります．「ヤロー未訪」(1803) において，現実のヤロー川に幻滅することによって，詩人はまだ見ぬヤロー川に対して抱いている長年の夢 (“a vision of our own”; “The treasured dreams of times long past”) が失われることを恐れていたわけですが，「ヤロー訪問」はその心配が杞憂であり，現実が想像と違わなかったと歌います．

But thou, that didst appear so fair
To fond imagination,
Dost rival in the light of day
Her delicate creation:

(“Yarrow Visited,” 41-4)

ラムがこのワーズワスの一節を引証した理由は，眼前の屋敷が，幼少時に過ごして数十年間心の中に温かいイメージとして保たれていた屋敷の様相と変わらなかった喜びを印象づけるためであることは，いうまでもありません．

さて，これから「マカリー・エンド」(以下 “M. E.” と略記)「ティンタン僧院」(同様に “T. A.”) の類似点と差異を確認したいと思いますが，基本モードの違いを念頭において，パラレルにみえる部分 (共にイタリック表記で示す) を探すという作業になります．

1. 前述のように，両者とも主題はゆかりの地の再訪です．そして，それぞれ一度目の滞在とは異なる意義づけがなされています．

She just recollected in early life to have had her cousin Bridget once pointed out to her, climbing a style. But the name of kindred, and of cousinship, was enough. Those slender ties, that prove slight as gossamer in the rending atmosphere of a metropolis, bind faster, as we found it, in hearty, homely, loving Hertfordshire. In five minutes we were as thoroughly acquainted as if we had been born and bred up together; were familiar, even to the calling each other by our Christian names.

(“M. E.”; II 78)

the tall rock,
The mountain, and the deep and gloomy wood,
Their colours and their forms, were then to me
An appetite: a feeling and a love,　80
That had no need of a remoter charm,
By thought supplied, or any interest
Unborrowed from the eye.—That time is past,
And all its aching joys are now no more,
And all its dizzy raptures. Not for this　85
Faint I, nor mourn nor murmur: other gifts
Have followed, for such loss, I would believe,
Abundant recompence. *For I have learned*

To look on nature, not as in the hour
Of thoughtless youth, but hearing oftentimes 90
The still, sad music of humanity,

(“T. A.,” 77-91)

2. 両者ともに，お供の女性がなくてはならないほど重要な役割を果たし，男性原理と女性原理がともに補い合う世界を形成しています.

The only thing left was to get into the house—and that was a difficulty which to me singly would have been insurmountable; for I am terribly shy in making myself known to strangers and out-of-date kinsfolk. Love, stronger than scruple, winged my cousin in without me;

(“M. E.”; ibid.)

thou, my dearest Friend, 115
My dear, dear Friend, and in thy voice I catch
The language of my former heart, and read
My former pleasures in the shooting lights
Of thy wild eyes. Oh! yet a little while
May I behold in thee what I was once, 120
My dear, dear Sister!

(“T. A.,” 115-21)

3. 一方は家屋敷プラス親類縁者，他方は自然の事物プラスその背後にある霊的生命，が訪問を意義づけます.

Bridget’s was more a waking bliss than mine, for she easily remembered her old acquaintance again—some altered features, of course, a little grudged at. At first, indeed, she was ready to disbelieve for joy; but *the scene soon re-confirmed itself in her affections*—and she traversed every out-post of the old mansion, to the wood-house, the orchard, the place where the pigeon-house had stood (house and birds were alike flown)—with a *breathless impatience of*

recognition….

(“M. E.”; II 77-78)

While with an eye made quiet by the power
Of harmony, and the deep power of joy,
We see into the life of things.

(“T. A.,” 47-9)

4. 一方では温かい友情が忘れられていた記憶を呼び起こし，他方では深い歓喜が事物の生命 / 本質を覚知させますが，いずれも想像力の働きの一側面とみてよいと思われます.

Bridget's memory, exalted by the occasion, warmed into a thousand half-obliterated recollections of things and persons, to my utter astonishment, and her own…old effaced images of more than half-forgotten names and circumstances still crowding back upon her, as words written in lemon come out upon exposure to a friendly warmth,

(“M. E.”; II 78-9)

While with an eye made quiet by the power
Of harmony, and the deep power of joy,
We see into the life of things.

(“T. A.,” 47-9)

5. 一方は過去の価値ある経験を回想することによるよい影響力にも人間的な限界を認めますが，他方ははるかに楽観的な印象を与えます.

when I forget all this, then may my country cousins forget me; and Bridget no more remember, that in the days of weakling infancy I was her tender charge—as I have been her care in foolish manhood since—in those pretty pastoral walks, long ago, about Mackery End, in Hertfordshire.

(“M. E.”; II 79)

Nor, perchance,
If I should be, where I no more can hear
Thy voice, nor catch from thy wild eyes these gleams
Of past existence, wilt thou then forget
That on the banks of this delightful stream
We stood together;

(“T. A.,” 147-51)

続いて，構造を検討したいと思います．このエッセイは，タイトルの示すように，エリアとその同居する従姉が故郷を探訪する物語ですが，全編1851語のうち，836語，実に45パーセントが「二重の独り者」(“double singleness”)の人柄や交友関係，読書の好みやふたりの暮らしぶりについて，特にエリアが従姉ブリジェットを紹介する形をとって，当てられています．このような構造をラムにして可能な魔法の文章作法といえば褒め言葉になりますが，欠陥とみられることもしばしばです．私はこの文章構造の淵源のひとつをコールリッジの詩の構造に求めたいと思います．ラムとコールリッジの深い交遊はコールリッジの亡くなるまで続きましたが，亡くなった数ヶ月後，ラムは親友について語る，というより，自身にとって文学者としてのコールリッジがいかに絶大な存在であったかを語る一文を残しています．

His great and dear spirit haunts me. I cannot think a thought, I cannot make a criticism on men or books, without an ineffectual turning and reference to him. He was the proof and touchstone of all my cogitations.

(The Album of Mr. Keymer, written November 21, 1834; I 351)

1798年に発表されたコールリッジの詩作品を二編，構造に注目してみてみましょう．「孤独の不安」は副題に「1798年4月，侵略警報の響く中で書かれた」とありますが，第一部28行には，静穏で豊かな自然の風物とその影響を受けて落ち着いた大人に成長した詩人の姿が描かれるのみで，他国からの侵攻に触れるのは第二部に入ってからです．

A green and silent spot, amid the hills,
A small and silent dell! O'er stiller place
No singing sky-lark ever poised himself.
……..
My God! it is a melancholy thing
For such a man, who would full fain preserve 30
His soul in calmness, yet perforce must feel
For all his human brethren—O my God!
It weighs upon the heart, that he must think
What uproar and what strife may now be stirring
This way or that way o'er these silent hills— 35
Invasion, and the thunder and the shout,
(“Fears in Solitude,” 1-36; イタリックは筆者)

また，「真夜中の霜」も幾分これに似て，詩人の側で眠る幼児は比較的早い段階で登場するものの，軽く触れられるのみで，第一部の詩人の現在の暮らしぶり，第二部の学校時代を経た後，本格的に語られるのは第三部においてです．

The Frost performs its secret ministry, 1
Unhelped by any wind. The owlet's cry
Came loud—and hark, again! loud as before.
The inmates of my cottage, all at rest,
Have left me to that solitude, which suits 5
Abstruser musings: save that *at my side*
My cradled infant slumbers peacefully.
……..
Dear Babe, that sleepest cradled by my side,
Whose gentle breathings, heard in this deep calm, 45
Fill up the interspersed vacancies

And momentary pauses of the thought!

(“Frost at Midnight,” 1-47; イタリックは筆者)

私には，コールリッジの詩にみられるこのような構造，さらに，詩の中心的な論理に直接的には結びつかない細部の事実に関する強い関心は，ワーズワスの中心をまっすぐに力強く進む書法とは幾分異なるように感じられます．そして，ラムはこの点でコールリッジにより近いという印象を与えます．ただし，『エリア随筆集』と『後集』を併せて比較すると，後者はよりふくらみの少ない，より直線的な書法で書かれていることは否定しがたいように思われます．余談ながら，おそらくそのために，ラムは前者でタネが尽きたと見る向きも少なくないようですが，個人的には，『後集』の特徴である鋭角的な輪郭をもつエッセイから力の衰えを感じることなく，むしろ，新たな，より純粋芸術的な方向に舵を切ったという印象をもちます．

* この研究論文は科学研究費（挑戦的萌芽研究「Charles Lamb のロマン主義作家としての位置付けを見直しする」（課題番号 25580061））の援助を得た研究の成果である．「チャールズ・ラムのロマン主義的特質」と題してイギリス・ロマン派学会第 39 回全国大会（2013 年 10 月 20 日，安田女子大学）にて発表したものを基にして加筆した．口語体はその名残であり，加筆部分もこれに調子を合わせざるを得なかったことを了解されたい．

参考文献

Editions, Letters

Coleridge Poetical Works. Ed. Earnest Hartley Coleridge. Oxford, NY, Toronto, Melbourne: OUP. 1912. Rept. 1980.

Elia & The Last Essays of Elia. Ed. Jonathan Bate. Oxford, NY: OUP. 1987.

The Letters of Charles and Mary Anne Lamb. Ed. Edwin W. Marrs, Jr. Vols.1-3.

Ithaca and London: Cornell UP. 1975-8.

The Poetical Works of William Wordsworth. Eds. E. de Selincourt and Helen Darbishire, 5 vols. Oxford: OUP. 1940-49.

The Works of Charles and Mary Lamb. Ed. E. V. Lucas, 7 vols. London: Methuen & Co. Ltd. 1903-5.

Criticism

Blunden, Edmund. *Charles Lamb and His Contemporaries.* London: CUP. 1933.

Courtney, Winifred F. *Young Charles Lamb 1775-1802.* N. Y. and London: New York University Press. 1983.

Haven, Richard. "The Romantic Art of Charles Lamb." *ELH* 30 (1963): 137-46.

Jessup, Bertram. "The Mind of Elia." *Journal of the History of Ideas* 15 (April 1954): 246-59.

Jordan, Frank. "More About the Romantic Art of Charles Lamb." *Charles Lamb Bulletin* 13 (1976): 89-101.

Mulcahy, Daniel J. "Charles Lamb: The Antithetical Manner and the Two Planes." *Studies in English Literature* 3 (Autumn, 1963): 517-42.

Riel, Joseph E. *That Dangerous Figure—Charles Lamb and the Critics.* N. Y.: Camden House. 1998.

Ward, A. C. *The Frolic and the Gentle.* London: Methuen & Co. Ltd. 1934.

Whalley, George. "Coleridge's Debt to Charles Lamb." *Essays and Studies* ns 11 (1958): 68-85.

Japanese Translations and Criticism

『エリア随筆』，戸川秋骨訳，岩波文庫，1940 年.

『続エリア随筆集』，石田憲次訳，新月社，1948 年.

福原麟太郎，『チャールズ・ラム傳』，福武書店，1982 年.